



東日本大震災義援金報告

日豪ジュニアプロジェクト報告



母性愛が育てる 未来の復興の担い手

岩手支部 齊藤恵子

昨年に引き続き第二次被災地中学生メルボルンホームステイ事業が、2013年8月17日から27日まで実施された。今回は、宮古地区から3人の女子と、山田地区から男女1名ずつの計5名が各学校から推薦された。まず、県庁保健福祉部長に趣旨説明に伺い、岩手県、岩手県教育委員会、岩手県医師会の後援をいただき、地区教育委員会指導主事のお二人がプレゼンテーションの準備、指導に取り組んでくださった。私の三度の宮古教育委員会訪問に、一度はメルボルン在住20年で、アボリジニアートにかかわっている内田真由美さんが私と同行くださり、安心して渡豪するようにと生徒と家族に説明下さった。不安と期待を胸にした中学生5人に、岩手支部の玉木光子先生と私が付き添ってメルボルンへの夜間飛行。現地到着後、この計画の発案者の一人である秋元みどりさんが、交渉して下さったホームステイ先に一緒に一人一人を送り届けた。短期留学受け入れ先のブライトンセカンダリーカレッジでは、全校生の集会で5名がそれぞれ自己紹介、私も震災を経験した生徒を受け入れてくれたことに感謝して「この体験は自分の街の復興にこの中学生が大きな働きをするのに役立つことだ」と挨拶した。毎朝の5人のための英語の授業で、日毎に英語に慣れて伸びやかになってゆくの

が確認できた。生徒達のプレゼンテーションの機会は二度あり、震災の状況、仮設に住んでいる状況、復興が進んでいないことなどを、スライドを用いて英語で発表、復興の歌「花は咲く」を歌って締めくくった。歌詞の英訳を配布したが、生徒や先生の中には涙を浮かべて聞いている様子が見られた。5人は二度の新聞社のインタビューを、学校に設けられた日本庭園で受けたが、怖気ず、楽しげに英語で質問に答えていた。生徒達5人がホームステイ先の同級生たちと歓談している様子や、心身の異常もなくすこせしていく様子を確認して安心して一足早く帰国した。

27日帰国の日、彼らは空港ではすっかり馴染んだ

メルボルンの方々と涙の別れをしたとのことであった。28日盛岡駅に無事到着した彼らの表情は、晴れ晴れとして疲れもみえず、そのまま県庁で保健福祉部長、教育長に帰国のあいさつをした。そこに待ち構えていた新聞二社や、テレビ局のインタビューに的確に答えている様子に彼らの成長が認められた。その数日後、校長先生からスピーチコンテストで1位になった女子生徒の話が聞かされた。そして、行かなかった生徒達にも波及効果があり、ありがたいとお話だった。

思うに、ひとりの幼子を持つメルボルンの日本女性がカレンダーを売って被災地の子供を招こうと考え、日豪の画家たちに協力を仰ぎ、カレンダーを作成、妊婦となりながら、1部1,000円で販売に奔走し苦勞していた。そこに、秋元みどりさんが被災直後の岩手の悲惨な災害状況を見て、岩手の被災地の中学生をお世話したいと支援先が絞られ生徒さん探しが対馬ルリ子先生を経て、私に委ねられた。縦長の岩手の沿岸被災地区は広く戸惑ったが、岩手県医師会と岩手県保健福祉部、岩手県教育委員会の協力、そして日本女医会から義援金を寄付してもらい、この事業に主催者として参加下さった。

メルボルンから発した女性の母性愛が、日本女医会の被災地支援につながり、未来の復興の担い手を育てることになったこの遠大な事業に私も汗することになったことを幸いに感じている。これから参加した生徒さんたちとの絆を強め、成長を見守ることも大切にしつつ応援者を広めて、来年度に向けていかねばと新たな決意を固めている。感謝を込めて。

津波 復興 英語でスピーチ



同様の思いを学び、現地の人々と積極的に交流した体験を語る参加生徒
 津波被災地を訪問した中学生5人が、現地の人々と積極的に交流した体験を語る参加生徒
 津波被災地を訪問した中学生5人が、現地の人々と積極的に交流した体験を語る参加生徒

絆強めた豪研修

宮古と山田 県庁で成果報告

県庁で成果報告をする中学生たちを報じた新聞(岩手日報平成25年8月28日付朝刊)

日本女医会から発した女性の母性愛が、日本女医会の被災地支援につながり、未来の復興の担い手を育てることになったこの遠大な事業に私も汗することになったことを幸いに感じている。これから参加した生徒さんたちとの絆を強め、成長を見守ることも大切にしつつ応援者を広めて、来年度に向けていかねばと新たな決意を固めている。感謝を込めて。